

日本生態学会関東地区会

会 報

第 28 号

April 1979

目 次

生態学会全国大会を終って

- 1) 第 26 回日本生態学会大会願末記
実行委員一同 (1) 頁
- 2) 生態学会第 26 回大会に参加して
青木 一 郎 (4)
- 3) 動物関係の数理モデル講演等に関する印象記
白木原 国 雄 (5)
- 4) 横浜の大会に参加して感じたこと
松田こずえ・木村和喜夫 (6)

例 会 報 告

- 1) 第 1 回例会 (7)
- 2) 第 2 回例会
研究船でウナギやイカなどをとる話
田 中 昌 一 (7)

研究会の紹介

- 1) 房総の自然研究会 (9)
- 2) 社会性昆虫勉強会 (10)
- 3) 海洋生物生態談話会 (10)

- 事務局だより (11)

生態学会全国大会を終って

第26回日本生態学会大会(1979年3月27日～30日)は横浜国立大学教育学部で盛大に開催されました。その主催者として御活躍くださった実行委員会の方々、及び参加者の若い方々の印象記を書いていただきました。

第26回日本生態学会大会顛末記

実行委員一同

どんな小さなことでも、何かはじめてのことを引き受けて、実行し終るまでには常に不安がつかまとう。ましてこの度の様に、横浜ではじめて25回の歴史をもつ日本生態学会大会をお引き受けし、何とか無事終るまでには常に不安があった。はじめ横浜でお引き受けするについても、何の目算もなく、今までのいき方と同じように多分に見切り発車的な要素が多かった。いざ準備委員会、さらに学内に実行委員会を設けてタイムスケジュールに従って準備に入っても、何か大きな見落としや、手落ちはないかと多少の心配が伴っていた。

結果的には、関東地区委員会の準備委員の皆様、さらに実行委員の皆さんの周到な準備と御努力によって、一応成功裡に3月27日～30日の大会を終えることができた。参加者420名(その中の実際参加者は389名)、さらに当日参加者247名、計636名の参加者を得て各会場での一般講演、二つのシンポジウム、関連集会、各種委員会、総会共に予定通り、とどこおりなく進行した。

ここには、地区会報委員からの御依頼に従い、今更……という感もするが、大会の準備・実行の際の裏話的なことを述べさせていただくことにした。多少とも失礼な点がありましたら、お許しいただきたい。(宮脇 昭)

1. プログラム編成のこと

「私の講演がどうしてこんなところに配置されたのか理解に苦しむ」、「同じ専門の人たちの講演のところで話をさせてほしい」と、内容を要約すればこのようなことになるのだが、その表現形式はかなり強烈な、いや味たっぷりのお手紙を何通かいただき、もうプログラムを会員に発送し、座長さんまで依頼してしまった後のこととて、正直いつて我々一同頭を抱えこんでしまった。これも、もとはといえば私(背木)が準備委員会の席上、次のようなことを強く主張し、皆さんの同意をとりつけたためなのであった。それは「分類学会ならいざしらず、生態学会の大会において、哺乳類は哺乳類、アリはアリというように、生物の分類にしたがって講演がまとめられ、配列されているのはおかしいのではないか。本来ならば、たとえば配偶行動を研究している人ならば、その研究材料が魚であろうと蝶であろうと話を読み、互に議論すべきであり、材料にこだわっているのは本当の生態学ではない。特に動物の講演がいつも分類順に並べられているのは解せないから、今年の大会ではまず第一に研究内容で区分してみようではないか」ということ

であった。

しかし、このやり方は結果的にはうまくゆかなかつたようである。そんなこととは御存知なかつた講演者・聴講者・座長の中でずいぶん面喰つたり、不満な思いをされたりした方々が、声に出していわれた少数の方の他にもかなり居られたのではないかと思う。やはり永年の習慣を破ることはむづかしいし、もし破るならば、前以つて申し込み時にその方針を会員の方々に通知し、申込票に講演区分を設けて印をつけていただくようにすればよかつたなあ、と後悔することしきりである。(宵木淳一)

2. 会場の電灯点滅と暖房のこと

アルバイトの人数を出来るだけ切りつめようというわけで、各会場の電灯スイッチをスライド映写係のところまで延長してここで操作すべく、室の入口にあるスイッチから映写台までのコードやら、点滅スイッチやらを購入して準備し、大会前日にそれらをセットしたのだが、これが思うようにうまくいかない。いろいろ調べるとA、B会場に使った棟は室内棟まで200Vを使用しており一般のコードでは熱をもって使用不能とわかり、一方C、D、E会場の棟はスイッチが管理室でも操作できるリモコンスイッチになっており、これまた普通の点滅スイッチでは使用不可。簡単に思っていた電灯の点滅移動が結局不可能とわかつて急ぎで電灯系のアルバイトを探す。建物が新しくなり色々新しい設備があるのはいいのだが思うようにはならないもの。

生態学会が行なわれる4月上旬は時として非常に寒いことがあり、今回も会期をいつにするかという時に、3月末までなら集中暖房が入るはずということで、3月下旬の平日3日間を会期と決定した。ところがである。準備も万端ととのい始めた3月中ば近くなつて、省エネルギー政策の一環で3月20日で中央官庁の暖房打切りということがニュースになった。暖房が入るから3月下旬に決定した会期だが暖房が入らなかつたらどうしよう。事務局と折衝するやらおおわらわ、結弓横法大は中央官庁ではないようで3月20日打切りの通達は来ず、3月末迄暖房が使えることになり、その折衝のなかで夜7時迄暖房時間の延長を学会で残業手当を持つことで話し合いがついた。しかしながら暖冬の今年は各会場とも室温が上がりすぎ、会場係は室温を下げるのに苦労しなくてはならないはめとなる。これまたお天気ばかりは思うようにいかないもの。

(遠山三樹夫)

3. シャクにさわること

一番こまるのが電話である。ベルがなる。受話器をとる。「そちら生態学会ですか。〇〇先生呼んで下さい」。何いつてんの、五つもある会場のどこにいるのかわからん相手をどうやって探せというのか腹が立つ。命にかかわる用事なら探してきますよと返事をする。ねばられてピラを5枚書き接待のアルバイトを各会場にはしらせる。学会での呼出し程面倒なものはない。これだけのかんべんしていただきたいものだ。そのために専用アルバイトを用意すればそれだけ大会費の値上げにつながるのですぞ!

更におそろしいのが現われた。〇大学の〇氏、本部に来ていわく、この大学にはスライドを作る機械はないのかときた。学会発表をやる人間なら大会場にきてスライドを作らせるなどはとてもとても我々の常識ではわからない。「大学のなかにはありませんよ。街の写真屋を紹介しまし

ようか」ということで引きさがつていただいた。翌日○氏本部に来ていわく「視聴覚教室に機械ありますよ」。そんなことは当方知ってはいたが、まさか会場を引き受けた大学でそこまでサービスしなければならないとは思ってもみなかつたので、ないと返事をしたわけだが、○氏学内をいろいろ探し歩いたようで、その努力は立派だが何かわりきれない後味の悪さ。翌日視聴覚教室へおわびに出向くことになる。(遠山 三樹夫)

4. 会計疲労話

大会会費を4,500円(学生3,500円)と決定したのは大会をさかのぼること約9ヶ月前の昨年6月。例年の大会会費に物価上昇指数をかけてはじき出したが、その時には果して何人集まって、いくら金が集まって、いくら出てゆくのか全く五里霧中、きわめて心配なスタートであった。大会への申込金は大会費、懇親会費、それに3日間の弁当代金もふくめて振替で前納ということになったが、これらの項目の組み合わせで送金額は千差万別となる。実行委員会へは本人からの申込書のみ、郵便局からは合計金額の入金写のみが知らせられるが、合計額とその内訳とがぐいちがつたり、未納だつたり、振替の他小為替、現金書留、小切手など様々、しかも申込数が300を越すようになると、まず正確な数字をはじき出すのは困難で、とうとう研究者一名がこれにかかりきりになることになった。

大会会費が集まり出してから、やおら予算を組みはじめたが、印刷費やアルバイト代がばかにならない額に達することに気がつき、会計係は多分にあわてふためいた。バイト代を極力きりつめたり、準備委員会や実行委員会においても御出席下さった先生方に旅費も払わず、会合が夜になつても飯も出さず、極力節約してはみたものの、どうももちそうにもない。そうすると道は一つ、いかに収入を増やすかということになる。その目当は広告料と当日会員の参加費だ。当日会員増加運動の方は神奈川県下では初めての大きな学会ということで、地元ジャーナリズムの関心も集まり、また大会会長の知名度も手伝って予想をこえる人数が集まり、まずまずの成果となった。したがって、お手伝い下さった学生や教官にも、昼の弁当やお茶菓子を買うことができ、ほっと一息つくことができた。(奥田 重俊)

5. 広告は双方の損

広告依頼は経験のある方はその手順など何のこともないと思われるが、会計担当の小生あいにく経験がない。依頼先も皆目見当がつかなくかつたが、幸いすぐ前に千葉大学で行なわれた植物学会の要旨集にはたんまりと広告が掲載されている(これはかなりの収入になった模様)のを見て、これを拝借したのはよいのだが、どのように依頼すればよいのかわからない。ままよ、直接電話までと広告頁の中から○○書店を見出しダイヤルを回した。「あのう、広告をお願いしたいのですが」「ああそうですか。係の者と相談します。で、そちらの要項をかいた文書を送って下さい」「文書があるんですか」、「当たり前でしょう。いくらが大きさが何円だとか、いろいろとりきめの書いてあるそちらの名前入りの文書が必要です」。考えて見れば当り前のことで、見も知りもしない人間から電話一本あつただけでいきなり商談がまとまるはずもない。あわてて、「広告掲載についてお願い」なる文書をでつちあげ、これとは思う会社に手当り次第送りつけ吉報を待ったが結果はいかに。広告料が高かつたのか、世の中が不景気なのか、それとも文書が気に入らな

かったのか、返事はわずかに数社、1割8分の低打率となった。

広告に関してはその後、承諾いただいた社への礼状、版下の校正やわりつけ、出来上った印刷物と請求書の送付、入金後の礼状と領収書の送付等々、様々に気のつかうことが多く、わりの合わない仕事であった。(奥田重俊)

6. 盛大(?)だった懇親会

懇親会は地区会の準備委員の皆様からの要望もあつて、横浜名物中華街で盛大に行つてはということであった。早速、地理に詳しい浜っ子の遠山君が青木、奥田両君と現地調査、聞き込み調査の末、重慶飯店別館を予約してきた。しかし、値段が1人当り5,000円とちょっと高すぎる。また、場所が中華街のメインストリートから少し入ったところにある。折角遠山君たちが決めてくれたのだが、「大通りに面してもう少し良いところがあるのではないか」。「値段ももつと値切つていかに安くさせるか」。「俺が行つてもう少し探してくる」とばかり、奥田、鈴木両君を引き連れて目ぼしい店を片っ端から当つて見た。

行つてみてわかつたことだが、100人以上の人が入れる部屋をもつた店は少ない。仕切りを取つてウナギの寝床の様な会場をつくらすことで値段交渉に入つた。ところが、さすがは一枚板の団結を誇る、商売上手の華僑の人たち。行く先々の店ですでに先方に、また国大から値切りにくるぞと情報でも入つてるとく、どこへ行つても同じ値段で、ピタ一文値引きできないという。結局、最初に遠山君たちが予約してくれた会場のもつとも大きく、洗練されている重慶飯店に落ちついた。

はじめて中華街を訪れた方のため、バスから降りた皆さんを知らん顔して、わざわざ中華街を通つて遠廻りして案内し、雰囲気を味わつて載いた。また値段の高い分はあちこち他の面で苦面して、飲み物は皆さんの満足載けるだけ出したつもりである。幸いにも、我々の秘めた苦衷を会員の皆様が感じとられたらどうか、懇親会にも当初の予想以上の130名の多数の方の参加を得た。奥田君たちの苦心の演出によつて春の一宵を港横浜で満足載けたのではないかと私たち一同ホットしている次第である。(宮脇昭)

この大会を横浜でやらせて載いて準備委員、実行委員さらに会員皆様の御協力、御援助に心から感謝しています。同時に案外本命の筋書以外のところでいろいろ苦労したことも事後雑感の一つとして記憶に残っています。(宮脇昭)

生態学会第26回大会に参加して

青木一郎(東大・海洋研)

第26回全国大会は、いつもながら若い人の参加が多く、そのかもしだす自由な雰囲気が開場に好ましい感じを与えてくれた。

一般講演(動物)を対象動物別にみると、昆虫や哺乳類を扱つたものがかかり多く、次いで鳥類、ベントス、魚類の順になっている。水産の者としては魚類や海洋を対象としたものが少ないのはさびしい。これはアカデミックな原因よりもその他の事情が働いていると思われるが、生態学会としての研究分野のバランスからも、もつと魚や海の話がふえることを期待したい。

講演の内容をみると、一つは、数学的モデルが年々多くなっているのが目立つ。そしてここでも殆んどは昆虫を仮定したものになっている。それに関連してシンポジウム「生物の動きのモデル」も開場が満員になる程盛況であった。しかし関心の多さにもかかわらず、残念ながらそれ程盛り上がった討論は行われなかった。

そして一方では、若い人が身近な自然の中で、動物の生活史を追求していく研究が多かったのも印象的であった。

なお、プログラム編成において、講演は動物群別にならずしも分類・配列されていなかったが、むしろ完全に分類した方が聞き易いという声もいくつか聞かれた。これは今後の参考になろう。

動物関係の数理モデル講演等に関する印象記

白木原 国 雄（東大・海洋研）

今回の学会での数理モデル講演は、その数のみならず聴衆の数も多く、さらに演者の主力が若手研究者であったことを考えると、数理生態学はまさに上昇気流に乗っており、今回最も目立つ分野の1つであったらう。

講演の多くは自らのデータをもたない理論モデルの講演であった。このようなモデルだと現実との対応を演者が意識して説明するものと思っていたが、必ずしもそうではなかった。確かに他人のとったデータに良く適合することを示したとしても、そのこと自体が効用のある場合を別にすると、モデルの正当性の根拠のみにそれを使うのは誇れることではない。むしろ実証の困難な、あるいはその試みのなかった世界の基本的しくみなどを推測するためにモデルをつくるのなら、現実データとの対応にこだわる必要はないのであろう。とはいうものの、この種のモデルは生物学的次元を離れた所で論議してしまう危険性があるし、自らの考えているモデルの世界を短時間に適確に伝えるのは困難な作業であらうから、*field ecologist* にはむづかしい以上の何物の印象をも与えないかもしれない。生態学会での現在の好調ムードがそのまま定着するには、やはり現実の世界と何らかの形で接点を持ち、その点を通じて *field ecologist* と対話できるものを含むモデル研究が必要となるであらう。

シンポジウムは「生物の動きのモデル」という茫洋として企画者の苦心を思わせるテーマであったが、講演者の話題提供は各々共通の基盤をもつものとは言えず、質問、議論も単発的であったと思う。今後もモデル関係のシンポジウムを続けていつてほしいが、テーマを数理生態学者と *field ecologist* とがかみあう具体的な問題にしぼり、生態学における数学モデルの価値や効用について考えるというのは1つの提案だがどうであらうか？

自由集会は、今回初めて参加したが、ビールを飲みながらくつろいだよもやま話ということであったので、小人数でワイワイやる雰囲気かと思っていたが、ここでも人はいつばいいた。話題提供は、アメリカ、カナダでの研究経験のある方々が、各々の生活談をスライドを使って語るなか、あちらの国の数理生態学の現状やトピックスをませ、誠に面白かった。次回の弘前の学会で、数理生態学者の活躍が一層目立つことを期待して、駄文を終わることにしよう。

横浜の大会に参加して感じたこと

松田こずえ・木村和喜夫(東京都立大)

今年の生態学会は、横浜という日本列島の中央で行なわれたため、一般講演の演題数もかなり多かった(九州大会230、今回316)。それだけにプログラムの編成は大変であったろうと思うが、植物に関しては良かったのではないかと思う。集まる演題が多いとその中でグループ分けが出来、一連の講演が並ぶことになる。今回は、植生、群落の動態、植物と環境の関係、遷移など問題意識別にあるまとまりがあつて、一会場に落ち着いてじっくり聴けた人も多かったのではないだろうか。やはり演題数は多いほうがよい。ただ時間の制限があり、例えば九州大会で設けられていたような調整時間がなかった。問題意識に共通性があればそれだけ議論が深まるだろうが演題数が多いとそのような討論の時間がとれなくなるのは矛盾である。

内容的には、現象の動的な面、すなわち、ある場所に何が生えていたというだけでなく過去においてどのようにして生え始め、これからどうなつてゆくのかということを具体的に示し、さらになぜそうなのかということを明らかにしようとする研究が増えてきて大変面白いと思つた。自分自身の研究もそのような中でとらえたい。

また学会の良さは、自分が直接扱つてはいないが興味のあること、例えば私のようにドングリの落下を調べている者がネズミ(ネズミはドングリを食う)の生態の話や、*Quercus*の花粉分析の話や聴いたりして知識を得ることができることである。そうすると会場を転々とすることになってしまうのだが、先に述べたようなじっくり聴くということが出来なくなってしまう。どちらをとるか悩むところである。(それを考えると講演要旨は発表を聴かなくても内容が理解できるものであつてほしい。)

種子生態談話会と群落談話会に出たが、どちらも盛況であつた。逆に盛況になればそれだけ発言しにくくなる。先生の意見を拝聴する場になつてしまう。本来の談話会の良さは今まで全然面識のなかつた人と知り合いになり、共通の話題で話ができるというところにある。また、知遇を得ることが将来の仕事の発展につながるかもしれない。(例えばfieldの情報交換など。)ましてや全国から集まつてくるのである。せつかく談話会に出席してもそうならず、バラバラと解散になってしまうのはなんだか残念であつた。(松田)

学会が終わつてすでに長い月日がたつてしまつたような記憶の中で、シンポジウムⅡ、“自然と人類文明の共存は可能か”の印象はとくにボヤけている。企画としては、非観的な見解と楽観的な見解のそれぞれをうまく混ぜてまとめたいという期待があつたのかもしれない。しかし、あまり積極的な意見はとうとう聞かれなかつた。話題提供者は、それぞれのテーマをこなそうと努力してみてもなかなか自然と人類文明の共存という大テーマにはせまれなかつた。また、せまりようがないとも言える。ただ、唯一の学生であつた小川氏が大家の中で積極的に話題を提供しようとしていた姿と、宮脇氏に対して峠田氏が、ふるさとの森として照葉樹を植えることは人間にとって果して住みやすい環境を作ることになるのだろうかという疑問を出されていたのが印象的であつた。生態学という学問が環境問題に対して直接的には無力であるのと同様に人類文明と自然との共存に対して何かを示唆できるほどになつていないというのが正直なところであろうか。

(木村)

例 会 報 告

第 1 回 例 会

日 時 : 1978年9月15日 14:00 ~ 17:00
場 所 : 横浜国立大学環境科学研究センター
演 者 : Dr. H. Ellenberg (西独、Göttingen大学教授)
演 題 : "Stabilität" und Regeneration verschiedener
Wald-Ökosysteme

通 訳 : 宮 脇 昭 教授 (横浜国大・環境研)

この講演会は横浜国大・環境科学研究センターと共催して行った。50名以上の参加者があり、例会後の懇談会を通じて、多くの情報交換と活発な討論が行われた。(宮脇昭教授の明瞭且つ明解なる通訳により参加者はドイツ語による講演を充分理解することができた。)

Ellenberg教授は森林の構成種数と"安定性"および復元との関係を3つに類型化し、その考えを世界各地の森林生態系に適用することを試みた。3型とは、A. 極端に構成種の多い森林(50種以上/ha)、B. 比較的種類の多い森林(約4~10種/ha)、C. 極端に単純な森林(1~3種/ha)である。また、生態系は非常に複雑な関係でなりたっていることを指摘し、さらに永久試験地を設定し、多くの研究者が総合的に生態系の研究をすることが重要であると強調された。(立川賢一記)

第 2 回 例 会

日 時 : 1979年3月17日 14:00 ~ 16:00
場 所 : 東京大学海洋研究所講義室
演 者 : 田 中 昌 一 (東大海洋研教授)
演 題 : 研究船でウナギやイカなどをとる話
講 演 要 旨

東京大学海洋研究所は、海上での研究のために、研究船を2隻もっている。総トン数260トンの淡青丸、3,200トンの白鳳丸である。小型の淡青丸は主として沿岸域、白鳳丸は主として外洋域での研究に用いられている。これらの船は、物理、化学、海底、地質、生物など広い分野の研究に利用できるような、すぐれた設備をもっている。ただし大型の漁撈機械はもっていないので、魚類などの大量採集には適さない。

漁船なみの大量採集はできなくても、科学的研究のために必要な魚類等の採集は、いろいろな方法を工夫しながら、行われている。遊泳力のあまりない稚魚などは、大型のプランクトンネットで容易に採集される。イカ釣は、道具さえあれば、どんな船でもできる。小型のトロール網で底魚や底棲生物を採集することも可能である。その外、底刺網でサメをとったり、籠でカニや底魚をとったり、リール式釣竿で400mの底からスケトウダラを釣り揚げたりと、その例はかなりの数になる。ここでは、その2例について話したい。

◎ウナギ産卵場の研究

ウナギは日本人には極めてなじみ深い魚でありながら、その初期生態はよく解っていない。白鳳丸は1973年2～3月の航海から、1975年1～2月の航海まで、計3回のウナギ航海を実施した。第1回と第3回では、それぞれ1尾および2尾のウナギ葉形仔魚が採集された。一方1973年11～12月の航海では、沖縄南方洋上で、合計52尾の仔魚を得て、ウナギの初期生活史についてはじめてまとまった知見が得られた。

採集は口径4m、網の長さ10mにもなる大型のネットで行われた。この網はウナギ仔魚採集のために特に作られたものである。曳網水深は、表層、10～25m、30～70mとし、30分間水平曳を行った。

得られた仔魚の全長は47～60mmで、ほとんど最大体長に達しており、52尾中3尾はシラスウナギへの変態がはじまっていた。

30分曳網当りのウナギ仔魚採集数をみると、北緯22度、東経127～129度付近を中心に、東西方向に長めの楕円形の等密度線が描かれた。この水域は、水深200m層で水温21°C以上の暖水塊によく対応し、ウナギ仔魚の分布について重要な資料が得られた。

表層ではほとんど採集されず、また10m以深では、深度による差は見られなかった。ウナギの仔魚は、表層からやや下がった層に広く分布しているらしい。標本はすべて暗くなつてから得られた。明るい間はより深い層に分布し、暗くなると浮上して来るらしい。

沖縄の南方洋上にあつたウナギ仔魚が黒潮によつてうまく日本に運ばれてくるかどうかには疑問がある。ウナギの淡水域での分布は中国大陸、台湾、フィリピンにも拡がっており、産卵場はかなり広い水域におよぶと思われる。

◎日本海のイカの研究

白鳳丸で魚類などのネクトンの研究をしたいと考えていた時、スルメイカが容易に大量に釣れることを知った。イカ釣は普通、はなやかな色をした擬餌針を連ねたものを上下し、これにイカがだきついて来た時にすばやくとりあげる方法をとっている。針を数個つけて手釣りもできるし、数十個もつないだイカ釣機械もある。イカの群が濃い時は、一度に20匹以上も揚げて来ることがある。大型船は舷側が高く、漁撈作業がやりにくいのだが、イカ釣の場合ほとんど問題がない。そのようなわけで、イカ釣機械を3台もつて、1971年の夏、日本海へ出かけて行った。

日本海のほぼ中央部に、大和堆といって、水深300mくらいの浅瀬がある。このような堆のまわりは、しばしば良い漁場となる。またこの付近は、北方からの寒流と対馬暖流が接する極前線帯に当り、イカなどの浮魚の漁場の形成される所でもある。この航海は、堆周辺の漁場形成の機構を明らかにする目的で行われたもので、幅広い専門の人達が協力して、海底に流速計を設置したり、ブイを流したり、生物を採集したりして、堆周辺の環境や生物の観測を行った。

機械釣り、手釣りを合せて、469匹のスルメイカを採集し、外套長、体重を測り、性別および成熟度を判定した。イカを釣りながら、場所によつて大きさや成熟度の異なることに気がついたが、結果をまとめてみると、そのことがはっきり示された。

当時の大和堆近くの水塊配置は、南西側に100m層で10°C以上の暖水、北東側に同じく

10°C以下の冷水があり、冷水は南西方向に腕をのばして、暖水を南北に2分する形になっていた。冷水域をⅠ、南の暖水域をⅡ、北の暖水域をⅢとし、さらに堆北西のややなれた冷水域をⅣとすると、Ⅰで得られた標本ではすべて魚体は大型だが成熟率が低く、Ⅱ、Ⅲの標本では小型だが成熟率は高く、Ⅳの標本では大型で成熟率もかなり高かった。ほんの20～30kmしかはなれていない地点間で、水塊配置に対応して性格の異った群が分布していたということになる。このことが、一つの水塊の中の群がその水塊の中にとどまり続けるために等質になることを示しているのか、個体が生長や成熟につれて水塊を移っていくことを示しているのか、明らかでない。

1976年の夏、この問題を明らかにする目的で、再び日本海に行つたが、残念ながらスルメイカ資源量が著しく低下しており、十分な大きさの標本が得られなかつたため、前回の結果を裏付けただけに終つてしまった。(田中昌一)

研究会紹介

現在関東地区で、研究会や勉強会や談話会を行っているグループがいくつかあります。今回は3つの会について紹介致します。尚、本誌に紹介を希望されるグループは、会の名称、主旨、内容、連絡先を原稿用紙1～2枚にまとめて事務局宛御投稿いただけると幸いです。

房総の自然研究会

東京から近い房総丘陵滑澄山にある千葉演習林は2,200ha(うち天然生林が2/3)もあるが、東大の林学関係者だけの占有地同然であつた。1970年頃助手の一部は森林の究明には広範囲の分野からの協力がなければならないし、そのためには研究者の身分や所属の壁をとりはらうべきであると訴えた。当時の演習林長は2代にわたつてこのことを理解され、他大学を含めた学生・院生に研究費の援助を房総の自然研究会を窓口として行つた。さらに東大農・理、早大、農工大、千葉大、水産大、都立大、女子栄養大などの多くの教員・学生も文部省の特定研究・総合研究の補助金を得て、1971年以降、伐採跡地、天然林、人工林、集落地などにおいて、ニホンザル、小哺乳類、鳥類、水棲動物、無脊椎動物(主に土壌動物)、樹木の生態学的研究を行い、1975年頃まで継続した。

その後、研究費の切れた時点においても、東大の院生・学生・小中高の教員などからなる無脊椎動物のグループは、滑澄山の自然の魅力にひかれ、毎月1回、現地では会合をひきつづきもつていた。そのグループが研究成果等の発表の場として同人誌の発行を企てた機会に、植物や脊椎動物のメンバーも合流して1977年5月に会員制の組織で再発足することとなつた。

本年4月からは会誌「滑澄」(年1回発行、次号8号は12月発行予定)の購読、投稿を主とする一般会員(年会費1,000円)と毎月滑澄山で一泊して例会に参加を希望するゼミ会員(同1,200円)の2本立の組織になっており、会員は約70名で福島県から大分県に広がっているが、主に東京都と千葉県在住者である。森林地域に関心をもたれる方が多く入会され、会誌発行の原稿および財政の援助をお願いする次第である。

現在、4.20文部次官通達によるためか、演習林の管理が強化され、研究教育機関の業務としての調査・研究が優先され、所属のない者や学部学生・小中高教員は締め出されかねない状況に

おかれている。本会はそのような者の団結の場となるであろう。

連絡先 〒113 東京都文京区弥生1-1-1

東京大学農学部演習林研究部気付 郵便振替 東京5-21634

社会性昆虫勉強会

社会性昆虫とそれに関係する Sociobiology の分野は大きな広がりを持ち、その全体的理解はなかなか容易ではない。アリの研究者はアリのことしか知らず、ハチの研究者はハチのことしか知らないのが現状だろう。また関東地方では社会性昆虫研究者が孤立がちで情報交換も活発に行なわれているとはいえない。そこで社会性昆虫に興味を抱く関東地方の人間が、ハチ、アリ、シロアリといった区別なく、定期的に集まり、社会性昆虫を中心とした Sociobiology についての勉強会やいろいろな情報交換を行なえる場として本会を昨年12月に学生を中心とした有志で発足させた。以来、毎月第2、第4土曜日の夕方、東京四谷にある上智大学を会場に、読書会を中心として（現在のテキストは、E. O. Wilson: Insect Societies.）、時に論文紹介や映画をおり込みながら、学部学生、院生、教員などのメンバーで活動が続いている。本会に興味のある方は下記まで御連絡下さい。

連絡人 〒102 東京都千代田区紀尾井町7

TEL 03(238)3482

上智大学生命科学研究所 行動生物学研究室 増子 恵一

海洋生物生態談話会

原則として月2回、金曜日午後3時～5時。於東京大学海洋研究所講義室。研究航海等で原則通りに開催できないこともあります。1971年9月より1979年5月までに通算111回の談話会を開きました。このうち特別企画－生物群集における方法論－シリーズで次の7回が含まれています。

その1. アマモ場魚類群集の数量変動 立川 賢一(1976. 11. 30)

その2. 霞ヶ浦における漁業生物学的調査からみた群集 水口 憲哉(1977. 4. 28)

その3. アマモ場における種間関係から 向井 宏(1977. 5. 13)

その4. 植物社会学における植生と植物群落 奥 富 清(1977. 12. 9)

その5. 付着生物の群集構造 梶原 武(1978. 7. 6)

その6. アユと群集と生態学 川那部 浩哉(1978. 11. 3)

その7. 群集生態学の対象と方法 北沢 右三(1979. 1. 12)

各分野の有名・無名の研究者が集まって忌憚ない意見を交換する場として、自由に誰でも出席できるように公開になっております。海の生物学に限らず、生態学に関する話題の提供を歓迎します。参加希望者は、御申し出があれば案内を送ります。

連絡先 東大海洋研、海洋生物生態部門 相生 啓子

電話 03(376)1251 内線351

事務局だより

総会報告（1979年3月17日：於東大海洋研究所）

総会議長 中村方子（参加者12名）

- ①活動報告
- 会報27号発行
 - 例会2回開催（本誌参照）
 - 地区委員会開催
 - 第26回全国大会の開催（横浜国立大）

②1978年度（78. 3. 13～79. 3. 17）会計決算報告及び予算

収入の部

摘要	予算	決算	差引	79年度 予算案	備考
繰越金	178,303	178,303	0	303,617	
地区会費	218,800	254,400	35,600	★256,000	★640名分
還元金	180,000	166,750	-13,200	170,000	
銀行利子	-	689	689	-	
合計	577,103	600,142	23,039	729,617	

支出の部

摘要	予算	決算	差引	79年度 予算案	備考
事務費	80,000	51,865	28,135	150,000	
会議費	70,000	★24,560	45,440	60,000	★地区委2回分
会報印刷費	150,000	★93,000	57,000	100,000	★27号分
会報発送費	70,000	★69,480	520	35,000	★ "
謝金	80,000	26,220	53,780	30,000	
通信費	8,000	31,400	-23,400	120,000	
選挙費	-	-	-	45,000	
予備費	119,103	-	119,103	189,617	
合計	577,103	296,525	280,578	729,617	

78年度 総収入 - 総支出 = 303,617 → 79年度繰越金

③現在会員数(1979年1月)

正会員	509	
学生会員	106	
団体会員	43	合計658

おしらせ

- 関東地区委員の北沢右三氏の九州地区転出に伴い、地区委員会は一名減の26名となった。規約により後任は補充しない。
- 地区会長堀越増興氏が日本生態学会の臨時幹事になった。任期は一年。
- 日本学術会議第11期自然保護研連委員会委員に日本生態学会から関東地区会員の沼田真氏、手塚泰彦氏が推せんされた。
- 下記の地区会報のバックナンバーに若干余部があります。希望される方は返信用切手同封の上、事務局までお申し出下さい。

15. 16. 17. 18. 19. 20. 22. 23. 25. 26号

会報第28号

1979年4月20日発行

編集責任者 松本忠夫・相生啓子

日本生態学会関東地区会事務局

〒164 東京都中野区南台1-15-1

東京大学海洋研究所 海洋生物生態部門

TEL 03-376-1251

印刷 有限会社 平和堂印刷所

〒101 東京都千代田区東神田3-4-3

TEL 03-863-3965(代)
